

せた。長男勝一から、妻と三女が死亡したこと、長女と次女は中国で養父に育てられている消息を得た。

それから、二年後、中国に残留した娘たちが一時帰国し、夢にまで見た兄妹妹の再会が実現できた。現在、長女と次女は中国で一家を構え、幸せに暮らしている。

しかし、私の心の中の戦後は未だ終わっていない。異郷の地で寂しく死んでいった妻と三女。そして、あるいは生きて再び会えぬかも知れぬ長女と次女。このような悲劇は、再び繰り返してはならない。これが私の遺言である。

玄海をこえて

栃木県 山中新一

昭和八年現役兵として北滿チチハルで教育を受け、予備役少尉に任官。陸軍省の選抜試験に合格、渡滿、満州国軍に日本軍官として奉職することになった。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は、全滿州国の国境線を

突破、日本軍、満軍、開拓団を急襲、一方的侵略となつた。

そのとき、私は東安省の密山にいたが、八日新京（長春）に用務のため出発することになっており、東安の特務機関に立寄つた。

がぜん、機関内は騒然としており、密山南方の蜂蜜山国境監視隊がソ連軍に急襲され、かろうじて一人が脱出。私は新京出張どころでの話でなく、急ぎよ引返した。すでに部隊には撤退の命令があり、ぞくぞくと部隊、民間人は東安から汽車輸送。

東安、密山間は約十キロあり、その間に大河が流れていた。日本軍は、ソ連軍の追撃を考へて、鉄橋爆破のための工兵一個分隊を湖畔に残し、邦人渡河終了時点で爆破する計画であったが、奥地の開拓団には指示不徹底で、渡河以前に爆破してしまつた。そのための悲惨なかずかずの話が伝わっている。

東安駅から民間人、軍家族の一部は、最後の輸送車にかろうじて間にあつたが、駅近くにあつた多量の物資を格納していた貨物廠は、ソ連の略奪を恐れ、駅もろとも

爆破してしまい、それ以降、虎林線は不通となり、集合に遅れた者の悲惨な山中彷徨の序曲となった。

私どもの部隊は頭初から汽車輸送を避け、勃利を経由、牡丹江を目ざしたが、途中ソ連の空襲、土人の蜂起を避けつつ、約一か月後、綏濱線の亜布洛尼の部落でソ連の武装解除を受け、横道河子の捕虜収容所に収容された。横道河子の収容所に約一か月、「日本軍がウラジオに逆上陸した、ウラジオ經由で帰国する」などのデマにまどわされつつ、栄養不良で歩行困難な日々を送った。

その頃民間人はハルビンに返すとの情報を得、民間人の集団にまぎれこむことに成功、これがシベリア行きとの訣別だった。

幸い家族はハルビンの軍関係者が収容してくれたので雨露はしのげたが、当初難民扱いだったので、約半年ぐらいは食糧の配給はあった。後半になると、とどこおりがち、自前のクローリーのまねごと、立売り、富有な漢人の日雇い等々、約一年ハルビンに潜伏していた。

ようやく、日本人送還の協定が中共と国府軍との間に取りかわされ、家族五人、骨と皮になって、コロ島から

帰還したのが二十一年一月九日未だった。

実家にはすでに兄夫婦が疎開していた。苦勞に苦勞を重ね、ようやく定年を迎え、苦勞をかけた妻に少しばかり罪ほろぼしと思っていたが、無情にガンで私をおいて先に逝ってしまった。

命がけの石炭拾い

群馬県 笹沢 千万子

二十年春、私は南満の日本人の多い大石橋街で在満国民学校の教員、夫はソ満国境黒河の金融合作社に単身赴任、五月の節句に私を迎えにきて召集。東安の部隊へ五月、六月、七月と何回もの召集で街に男性は少なくなり、先生方もつきつぎと召され、校庭は防空壕と野菜畑になりB29が飛んでくるようになり、不安はつのるが、報道を信じ、必死に生きていました。

八月九日早朝、戦勝祈願に行くとき、校門前がにぎやかなので入ってみると、見すばらしい姿の老人と婦女